The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈特別エッセイ〉 I. 大阪大学大学院・名誉教授の方々より
Author(s)	
Citation	Osaka Literary Review. 2010, 48, p. 91-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25354
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

I

（大阪大学大学院・名誉教授の方々より）

玉井暲先生のご退職に寄せる

石田　久

愈々玉井先生が停年を迎えられ、ご退職になるということを正式に承り、感慨一入というところです。先ずは、無事に停年を迎えられることを心からお喜び申し上げます。

これまでは、大阪大学の英文学講座を停年で退職された方は、大抵は更に別の大学で、第二、第三の勤めをなさるのが普通でしたので、それを当然のことのように考えておりました。しかし、藤井治彦先生のことがあって、やはり無事停年を迎えるということは、色々な条件に恵まれた、めでたいことなのだと思うようになりました。「心からお喜び」と申し上げたのは、そういう背景から来るものです。

玉井さんと初めてお会いしたのがどういう状況であったのかを今思い出すことはできないのですが、多分阪大英文学会か何かの集いであったのだろうと思います。これは、可能性を後から考えてそのように思っているだけで、非常に永年にわたって頻繁に会い、親しくしている人といつ初めてあったのか思い出せないのが普通でしょう。多分彼が大学院に入られた頃ではなかったかと思われます。私はその頃、恐らく他大学に勤め、阪大の当時の教養部に非常勤講師として出講していたのではないでしょうか。

私の記憶にある若いころの玉井さんは、今と同様に、いつもダンディな服装で、にこやかな笑みをたたえておられました。少し早口で話すところも変わっていません。その後文学部の助手になられたころからは記憶が少しずつ

鮮明になります。

さて一方、本誌の昔ばなしとなると、記憶はあいまいになりかけていますが、これは既に一度発刊20年の記念号に書きましたので、記録によって正確に書けます。昭和37年4月に第1号が出ていますから、計画が出たのは前年の春ごろのはずです。創刊号の編集に当たられたのは、刊行の時点で、博士（後期）課程2年次在籍中の森晴秀氏（神戸大名誉教授、のち京都女子大教授）と同1年次在籍中の梅垣清氏（大阪女子大名誉教授）で、2年次在籍中の藤井治彦氏も全面的に協力され、特に、この雑誌の位置づけに苦心を払われました。純粋の同人誌ではなく、かといって英文学研究室の公的なものではないので、「半官半民」のような体裁を取ろうという提案をされました。

今も表紙を飾っている、誌名の活版は、森晴秀氏の力作です。*Saturday Review* の表紙の '*Review*' をモデルとして、それに合わせて 'Osaka Literary' をご自身でレタリングして、活字店で特注されたものです。第2号は柏木俊和氏（神戸大名誉教授）と私が編集を任され、経費節減のため大阪刑務所に印刷を依頼しました。親切に協力して頂いたのですが特殊な活字の手持ちが乏しく、町の活字屋に探しに行ったこともありました。むろん表紙の文字は私達の特別なものなので、刑務所に届けて使ってもらいました。第2号は体裁、紙質などで少し見劣りしましたが、私達の意気は益々盛んでした。第1号の時に劣らず、送付した全国の多数の先生方から、予想以上に暖かい反響を頂きました。「大学院英文学談話会」という名前を付けた学生の団体が刊行する研究雑誌は他にはあまり見られなかったからでもありましょうし、OLR のメンバーの日本英文学会の全国大会での発表が続いたせいもあるのでしょう。阪大の英文科は注目を受ける存在になりつつありました。

さて、玉井さんが OLR に参加されたのは第9号からでありました。（序ながら、この号は、表紙の号数が 'No. XI' となっていて、背表紙には正しく 'No. 9' と印刷されている珍しい号です。）実際に論文を寄せられたのは、第

10号（1971年10月）で、ワイルド論をもって颯爽と登場されたのでした。多分この年の春に提出された修士論文の一部なのだったのでしょう。この後、A. シモンズ論が続いて寄せられ、活発なご活動の始まりとなりました。

この10号というのは、少しいわくのある号なのです。玉井さんの登場の他に、特記すべきことが他に2つありました。ひとつは、第2号から続いていた大阪刑務所での印刷の最終号となったことです。第2号の頃に較べると、第10号は表紙や中の紙の質も、また刷りあがりの出来栄えも格段によくなり、一般の商業印刷所と変わらない域にまで達していましたが、多分先方の方針が変わって受注の対象が制限されたのでありましょう。

もうひとつは、第10号を一つの区切りとして、一定の学年以上の人が、同人を「卒業」したことです。それ以前にも、専任職（と同時に勤務先の発表手段）をえて、散発的に止めて行かれた方もありますが、まとまってというのはこの号が初めてです。この時に「卒業」したメンバーには、最初からのメンバーの殆どが含まれていました。最も学年が上であったのが、藤田実氏（大阪大名誉教授）で、その次の学年は、藤井治彦氏（後、大阪大文学部教授）、森晴秀氏（既出）、斉藤俊雄氏（大阪大名誉教授）などで、1962年に博士（後期）課程へ進学した学年までが中心でありました。柏木俊和氏（既出）と私もこの年に同人を卒業しましたが、同学年で残った人もありますから、厳密な線引きをしたのではなかったのでしょう。

思えばお互い長い道のりを来たものです。つい先日（09年8月初旬）天満橋で、奥様とご一緒のところへ偶然行き合わせた時も溌剌としておられ、事実を知らなければとても来春退職を迎えられるようには見受けられませんでした。

とはいえ、年齢は確実に心身を衰えさせるもの、呉々もご用心頂きたいと思います。私もずっと年齢を忘れておりましたが、この4月に生まれて初めて10日間の入院をする羽目になり、思い出した次第です。ご停年の後にもきっと新しい、素晴らしい世界が待っています。阪大とはまた違った意味で、

充実した日々になることでしょう。私もそういう日々を、あと暫らくは送りたいと願っています。

玉井さんのご健勝と、*OLR* の一層の発展を心からお祈り申し上げます。

（元英米文学講座教授、大阪大学名誉教授、大阪学院大学教授）

待兼山の40年

成田義光

私にとっての待兼山の40年が始まったとき、それは1968年ですが、私たちの敬愛する玉井　暲教授はまだ学部の学生でした。当時学生は教養部に2年在籍してから学部に進学するという制度でしたから、玉井君はその2年まえから待兼山の住人になっていたことになります。彼はOscar Wildeと（確か）世紀末文学の研究で卒論と修論を書いて、修了後すぐ助手に就任されました。（西暦も21世紀に入りましたから世紀末という言葉は今は使わないかも知れませんね。）主任教授の村上至孝先生のお話ですと、彼の論文は両方とも長大なものだったそうです。だったそうですとは無責任な言い方で、当時の論文審査は4人総当たりのときと、少なくとも3人が審査教官になるのが慣例でしたから、私もそのどちらか一つ、あるいは両方を読んだはずですけれども、はっきりとは思い出せません。この物覚えの悪さはご寛恕ねがいます。私と玉井君の共有する40年ほどの年月はその頃に始まります。

助手になってからの彼は、いつ助手室を覗いてもタイプを打っていました。村上先生の講義資料を作っていたのです。今のような複写機もワープロもなかった時代のことですから、助手の職務もかなりの部分が肉体労働だったでしょう。白紙にタイプした資料をどうしたかというと、青焼きといっていた文明の利器で必要部数をコピーしていました。私などは、洋原紙にタイプで

打ったのを輪転機で印刷したものです。言うまでもなく和原紙の謄写刷りも経験しました。もっと古い時代の助手の仕事は、朝出勤するとまず教授室の火鉢の火をおこすことだったそうですよ。このエッセイの執筆依頼は、WORD 97-03 形式で保存し、ファイル名は *OLR* 48 ― エッセイ ― 名前にするようにというご指示です。どうですか。あの青焼き時代から途轍もなく長い時間が流れたのです。

村上先生はいつも昼食は助手室でとられていました。私はよく厚かましくご一緒させていただいていました。当時学部の演習では、英語学演習も文学作品を読むことになっていました。阪大での最初の年私は村上先生のご意向で（と毛利先生から伺っていたのですが）Whitman を読むように言われていて、畑違いの新米の私には荷が重すぎるのはわかっていましたけれども、カリキュラムは着任まえに決まりますから、仕方がありませんでした。曠野の 40 年の始まりにもなりかねない状況でした。しかし 2 年目からは散文作品を読むことができるようになりましたので、語法研究の用例蒐集の内職もできました。

2、3 年経って Hawthorne の *The Scarlet Letter* をテキストとして使うことを決めて,その旨を村上先生にお話しました。先生は即座に、そのテキストには The Custom House は入っていますか、とお訊きになったのです。青天の霹靂でしたね。私は下調べは始めていましたけれども、第 1 章の The Prison-Door から読み始めていたのです。選んだテキストは Modern Library College Edition で、件の長い Introductory を大急ぎで読んだことを覚えています。後で玉井助手が耳打ちしてくれて分かったのですが、村上先生はこの作品の教科書版を南雲堂から出しておられたのです。不明を恥じる、とはこういうことを言うのですね。

言語文化研究科を一足先に定年退職された仙葉　豊君たちが学部に上がってきたとき、その後数年にわたって英文の年中行事になった和具旅行をすることになりました。その第 1 回目に、1 日だけ村上先生が参加されたのです。

和具の臨海宿舎には和舟があって、英語学の助手をしていた島田　守君が伝馬船を漕いでくれて、少し水深の深いところで釣りをしました。村上先生も乗っておられて、玉井君などは懸命に釣り糸を垂れていました。そのとき私はひょっとしたら櫓を漕いでこの伝馬船を操れるのではないかと思ったのです。意外、5分と経たないうちにかなり漕げるようになりました。村上先生が一言、体で覚えたことは何年経っても忘れないのですね、と。それからお調子者の私は玉井君をつかまえて、櫓を漕ぐコツは、櫓の先が8の字を書くように動かすんだとか言って教えました。彼はいやな顔一つせずに練習に励んで、彼の方が体力も器用さも一枚上ですから、またたく間に私を凌ぐほど上達したのは言うまでもありません。

こんなこともありましたね。昼食後いつものように助手室で四方山話をしていたとき、村上先生がひょいと、今度の学会は東京ですが、行きも帰りも同じコースというのはつまらないですね、と仰ったんです。もったいないサジェッションで直ぐに話がまとまり、学会2日目の午後新宿で落ち合って、小田急、国鉄と乗り継いで箱根の強羅で一泊というまことに優雅な復路になりました。強羅から芦ノ湖へはロープウェイでくだることにして、乗り場に行ってみると、60歳以上の方は一人ではお乗りになれません、と書いてあって先生が、あなた達が一緒でよかったとぽつりとおしゃったことが思い出されます。坂本　武君が一緒でしたね。

どうも玉井君のことは、村上先生を抜きにしては語れないようです。私は玉井君の結婚式に出席する光栄によくしましたけれども、その披露宴に村上先生は主賓として出席しておられました。1年か2年たった頃でしょうか、彼のご自宅に呼んでいただいて、彼には過ぎた（失礼、でもやはり過ぎた）奥さんの手料理で美酒を酌み交わしたこともありました。もう何年もお会いしておりませんが、けっして忘れていません、と奥さんにお伝えしたいです。待兼山が曠野のようなときでも彼が泰然自若として事に当たることができるのは、一重に内助の功の賜でしょう。

彼のお家は農家で、私の家も耕す田畑はろくになくても百姓家ですから、その点でも共通の話題が多かったと思います。いま高槻の我が家の猫の額ほどの庭にも、蜜柑、柚子、金柑、枇杷からレモンまで植えてあって、ちょっとした自慢の種ですが、それも玉井君の影響かも知れません。花より団子（実のなる木）というのが、飢餓体験を持つ私の主義ではありますけれども、椿や木槿をはじめ花の木も何種類かあります。すっかり年をとった私には庭は、鳥や昆虫と共に、狭いながらも命（いのち）のことを学ぶ教科書です。堤中納言物語に倣って言えば差し詰め虫めづる老爺というところでしょうか。英語学の河上誓作さんの失笑を買うことになりそうですが。

いつまでも若いと思っていた玉井 暲教授も今学年度末で定年を迎えられるとのこと、27年もの長きにわたる学生・院生たちの指導、いくつもの学会でのお働きを皆で拍手をもって讃えたいと思います。私としましては40年をこえる長い間のご交誼に心から感謝しています。ありがとう！ 学兄は心がひろく、明るい性格で、行動力のある研究者です。人みしりのひどい私などは年長ではありながらどれだけ助けてもらったことでしょう。学兄が築かれた大いなる遺産は後輩たちが受け継いで発展させるでしょう。待兼山も、その昔モーセがイスラエルの民を率いて遂に到達すことのできた乳と蜜の流れる地となって、訪れる貴兄を迎えてくれるでしょう。健康にも恵まれているといつもお見受けしていたとはいうものの、くれぐれもご自愛なさりつつ今後とも諸方面でよいお仕事をなさってください。奥さんの労をねぎらうこともお忘れなく。擱筆。

（元英語学講座教授、大阪大学名誉教授）

ペイターの波紋

藤田　實

高校生の時代に、いつもわたくしが手元に置いていた一冊の訳詩集があった。主としてフランスのモデルニスムやサンボリズムの詩のアンソロジーである第一書房刊の堀口大学訳『月下の一群』である。その影響があって、人間精神の内的経験そのものが言語に結晶したと思われる文学が啓示するものに惹かれ、それに影響を受けて、ジェームズ・ジョイスを卒業論文のテーマに択んだのである。

大阪大学の文学部は、私が入学する数年前に創設されたばかりであったが、その私が入学した年には、初代の英文科教授である竹友藻風先生が亡くなられている。その年度の講義題目にワーズワスの *The Prelude* があったことだけは記憶している。のちに文学部に兼任で講義をもったとき、シェイクスピアの作品に前後してワーズワスのこの作品を講義に選んだことがあるのは、一つには、この遥かな遠い記憶のせいでもある。ともあれ、学部の学生であった頃、後任教授がまだ決まらなくて、もっぱら助教授の矢本貞幹先生の講義を聞いた。この数年後に、矢本先生も阪大を去られるということになる。「ペイターの波紋」という題をえらんだが、阪大英文科の創世期のことに触れずには、ペイターの波紋は語れないのである。

矢本先生は、たしか *Centuries' Poetry* と言う英詩のアンソロジーをテクストに用いて講義をされたと思う。わたしは詩が好きだったから、これは熱心に聴いた。同時に、当時同志社大学からハベル先生が出講してこられて、モダンライブラリー版のアメリカ現代詩のアンソロジーを用いて講義されたから、さらにもっけの幸いであった。しかし、同じ程度にわたくしにとって幸

いなことは、同じ教室に、後に広島大学に行かれた坂本公延さんが一年先輩でおられたことであった。

当時は、第二次世界大戦が日本の敗戦におわってからまだ七、八年の時期で、＜戦後＞と言う言葉が、まだまだ十分にリアルな意味を担っていた時代であった。公延さんが、旧の海軍士官の制服らしき紺の上着をしゃんと着こなし、風呂敷包みをかかえて、神戸市内から豊中の待兼山のキャンパスに現れてこられるのは、大変に格好よく見えた。この公延さんが、矢本先生の講義が始まるまえに、その日に取り上げられる英詩の作品について、ひとしきり解説してくださるのである。公延さんは、当時、シェイクスピアの道化のことなどに関心をもたれていたのではないかと思うが、やがてヴァージニア・ウルフが研究の中心になった。秀でた感性の持ち主で、しかも後には英語でウルフ張りの小説を書いてイギリスのBBC海外放送に採り上げられるという語学の達人だから、公延さんの英詩の前講義が、聞かせどころのあるのは当然であった。これまで公延さんが出版された本の中には小説集もあり、また今日でも、折にふれて広島から作品を送って下さるが、わたしは、その作品世界を成立させている一見何気ない日常の会話にゆらめく不思議な静謐を、「公延浄土」とひそかに名付けているのである。

何故ここで公延さんのことを云うのかというと、矢本先生と公延さんとは、私の中で切り離せない存在だからである。公延さんに連れられて、たしか何度か矢本先生のお宅を訪問した。大阪市の東南部、東住吉区の正味の庶民的な住居に、先生はご夫婦で住んでおられた。公延さんは臆するところ無く愉快に文学論を展開し、和服姿の矢本先生はまじめに、ときにニコニコと半畳を入れながら、これを聞いておられた。先生は、会津八一を少し長谷川一夫に近づけたような風貌で、少しシャイ。普段の教室での講義や演習などは地味すぎるぐらい地味で、談論風発というところはなかった。講義は、たしかイギリスの文学批評についてであった。シェイクスピアは *Julius Caesar* を読んでくださったが、シェイクスピアも読んでおかなければというふうで、

教卓の向こうに座ったまま、学生が訳すのを黙って聴いておられるだけで、（歌舞伎や文楽も見ておられたはずだが）劇作品に対する思い入れなど微塵もその気配はなかった。そんな矢本先生の、私たち学生があまり知らない在り様を、公延さんのおかげでお宅では垣間見ることができた。矢本先生は、岐阜県のお生まれで、幼少の頃に川で危うく溺れ死ぬような経験をされている。また、お医者さんであるご父君を少年時代に亡くされたとか。何冊かの詩集もあるが、その一冊はたしか『白骨の対話』という表題で、おそらく中原中也あたりとつながる詩魂を物語ったものではないかと思う。また先生は、夏目漱石について並々ならぬ思いを致しておられたことが、話の節々にうかがうことができたし、漱石についても何冊かの著書もお持ちである。先生と公延さんを並べると、どこか漱石の『こころ』の＜先生＞と＜私＞という取り合わせが、目の前にあるような思いがするのであった。

矢本先生の本職の英文学者としてのお働きは、この時期、日本の英文学界にたいして現代英文学のT. S. エリオット、I. A. リチャーズ、それにエンプソンにいたる現代イギリス文学の批評理論を導入され、『英語青年』誌を中心とした評論や、また『近代イギリス批評精神』（1948）や『現代イギリス批評の先駆』（1955）などの著作が、その時代のめざましい先端的なお仕事であった。すでにランサムとかブルックスとかのアメリカ発のニュー・クリティシズムについても発言されており、このときすでに、後年の日本でのニュー・クリティシズム大流行の先取りしておられたのであった。

しかし、エリオットやリチャーズに至る文学批評の動きにふれて、わたくしはどこかある瞬間に、くつろがれた矢本先生がウオルター・ペイターのことを、*Marius the Epicurean* のことを親しげに口にされたのを覚えている。英文学というもの陰影が矢本先生の中で不意に濃くなった感じがした。明らかに矢本先生は、20世紀のイギリスの現代文学批評の動きの背後に、ペイターの影を見ておられた。というよりも、ペイターの批評の延長上に、芸術の自立性が確認され、さらにはワイルドが個人の奔放な唯美主義を芸術表現

を極限にまで推し進めた。そのワイルドの恣意的な自由を抑え、理性と教養と知識の支配を原理とするアーノルドに遡り、このアーノルドを受け継ぐかたちで T.S. エリオットの批評方法が生まれたと先生は考えられた。この先生のお考えは、それは建前として一応は整合性のある説明であるとしても、今日では、むしろ批評家エリオットと詩人エリオットは矛盾していて、ペイターを批判しつつも＜思想を薔薇の香りのように嗅ぐ＞と感覚の働きは否定せず、作品の『荒地』では、ある精神や経験の状態を *Marius the Epicurean* のように、言葉のイメージによって具象的に表現する方法を採り、それは＜眼に見える象徴主義＞と名付けられている。さらに言えば、ペイターは、この作品でマリウスの澄明で深い内的思索の世界を、外界を描いたイメジャリと、眼に見えない精神的状況とを照応させる手法によって、深く象徴的に表現させているという考え方もあるのだ。

ペイターにとっては、音楽も、彫刻も、詩も、それぞれの形式において人間の感性に優れた印象を創り出す。その印象の優れた結晶度がもたらす精神へのインパクトは、（音楽や彫刻や詩と言うカテゴリを越えて）美のインパクトと換算される。この美のインパクトへの換算が批評の動機なのである。音楽においてもっとも緻密に計量されるように、それぞれの芸術形式における美のインパクトの深さの計量の方法が、ペイターにとって文学批評の方法を深く自覚させるものとなった。"All art constantly aspires towards the condition of music" というペイターの言葉は、ほとんど間然するところのない見事な、また覆しようの無い決定的な表現である。この芸術への純一な志向の深まりが、ワイルドへのペイターの影響を深くしたのである。また上に述べたごとく、方向は少しずつ違っても、20 世紀の文学や、エリオット以降の文学批評を、多少ともペイターの影響下にあるという見方を生むのである。それは、結果的にペイターは、牽強付会を恐れずに言えば、いわば公延さんのヴァージニア・ウルフ理解にも、また当時のわたくしのジェイムズ・ジョイス接近にも、さらにはまた、高校生時代の私の手元にあった『月下の一群』

のそのサンボリスイムやモデルニスムにも、なにがしかの影響を及ぼしているといえるのである。イギリスの現代文学批評に思いを致すとき、ペーターは、そのように波紋を持った影響力そのものの存在として捉えることが出来るのではないかというのが、わたしの推測である。

矢本先生は東北大学の英文科のご出身であった。この英文科は土居光知の指導で優れた英文科を形成し、大きな影響力をかたちづくる。矢本先生の口からも、座談の中でおりにふれて「土居先生」と（＜イ＞にアクセントをおいて）お名前がたびたびもれたのを覚えている。この土居先生の『文学序説』は、昭和2年初版の名著の誉れの高い著作である。私の本棚の手に届くところにあって、時々参考にさせてもらっているが、この著書にもペイターは印象深い章を形成している。土居先生のお弟子というわけではないが、土居先生と知る人ぞ知る深い精神的つながりがある英文学者に工藤好美氏がおられたが、この方は、それこそペイター受容では、日本ではその右に出ることは難しいのである。（付け加えて言えば、私が高校時代に英語を教わり、後に関西学院大学に移られた植木錬之助先生にも『ウオルタア・ペイタアー研究』の著書があるが、先生も東北大学の土井先生のお弟子さんであった。）私は、矢本先生は終始冷静で公平な批評態度を維持されていたが、それでも英文学の中にペイターが深い陰影を投じているという見方は、そこからは決して消えることはなく、それが矢本先生と土居先生との精神的な縁を深めていたのではないかと思うのである。

私は、ずいぶん回り道をしてしまっている。この「ペイターの波紋」という文章で述べたかったのは、このたび大阪大学文学部を定年退官される玉井暲教授のことである。長い間言い習わしてきたのであるから、＜玉井さん＞といわせていただく。玉井さんは、昨年秋の阪大英文学会で講演をされた。その演題は「世紀末文学とは何か」である。講演の内容は聞かれた方も多いので省略させてもらうが、玉井さんは、オスカー・ワイルドの文学と批評の特質が、芸術表現における fact 崇拝を退治し、芸術を realism の牢獄から開

放し、いわゆる「虚言の衰退」から文学を蘇生させ、救済することから、話をスタートされた。そこでやはり興味深かったことは、ワイルドの発想の出発点にペイターが控えていたことであり、批評行為において大事なこととは、対象を＜あるがままに視る＞とではなく、対象が与える＜印象を認識する＞ことである。それはペイターも考えるように、芸術形式において再現されるものは単なる＜事実＞ではなくて、快い感動をもたらすような＜感覚的経験＞である。そのことで、玉井さんはペイターの評論 *The Renaissance* から、有名なレオナルドのジョコンダの肖像に関する部分を引用して話を進められた。つまりそれは、ペイターがこの絵画が触発する捉えがたい妖しさの感覚を、細部にわたって、（ちようど *Marius the Epicurean* で主人公のマリウスが嘱目の風景に対しておこなったように）ジョコンダの肖像についての具象の美を丹念に視覚に吸収していること。また、その印象を記述するその精神の姿勢と緊張によって、優にレオナルドのこの傑作の芸術性の高さとまさしく拮抗する批評主体の美的生活を堅固に造型する力を表現していること。そのことによって、ペイターは彼独自の、しかし深い影響力を持つ一種の創造的批評を形成しているということが指摘されうるのである。

玉井さんは、イギリス 19 世紀末の文学の特質を語るのに、ワイルドを軸としてアーノルド、ラスキン、スティーヴンソン、それに画家のターナーやホイッスラーなどにも言及されて、大変に内容に富んだ聞き応えのあるお話をされたのであったが、何をおいても、玉井さんのお考えの中にペイターが重要な位置を占めていて、そのことが、誰もその後に追従できないような質とレベルに美の使徒としてのワイルドを押し上げ、イギリスの 19 世紀末の文学と芸術を豊富な美の表現世界にしたことを、改めて認識させるものがあったと私は感じたのである。玉井さんのこのペイターへの言及が、私の中に一つの波紋を生んだ。その波紋のひろがりのうえに、旧師の矢本先生とペイターのことが、意識の水面下から浮かび上がってきた。このことを書こうと私は思った。

玉井さんがお話で触れられたレオナルドのジョコンダの肖像に関するペイターの記述のことで、一つだけ付け加えてよいことがある。矢本さんは後年に、この記述について、土居光知・工藤好美著『無意識の世界』(昭和41年)において、土居先生がさらに新しい神話的想像力を駆使して、新解釈を提示されたことへの驚きを、自著の『文芸批評のこころ』(昭和57年)で報告しておられるのである。それは、特にこの肖像に対するレオナルドの記述の後半部、すなわち、"She is older than the rocks among which she sits; like the vampire, she has been dead many years, and learned the secrets of the grave" で始まる後半の叙述については、レオナルドがこの肖像を制作するために、タブローのあらゆる部分についてあらかじめ深く綿密に資料をあつめ、それにもとづいてこのモナリザ像を制作したのにたいし、批評するペイターの側でも、地質学的に、神話学的に、また身体解剖学的に科学的な調査を行い、そのデータの上に立って自分の想像力を駆使している。ペイターの「想像力批評」の新しい試みがそこに見られるのだ、という見解である。この驚きは、ペイターの批評精神にたいする新たな考察の可能性が、これからもさらに進められうるものであることを示唆するものとして、非常に興味深い。

わたくしはこの文章を書くにあたって、本棚の高いところにかくれていたずいぶん昔に読んだ黒いバックラム装のテキストを引っ張り出した。研究社版の英文学叢書 Pater: *The Renaissance* であるが、奥付を見て、それが昭和10年の発行の竹友藻風先生の編注になるもので、しかもその最初の出版の年、すなわち初版は、大正11年に遡るのを知って驚嘆した。しかも、その序文には、「蔭になり、日向になり、終始温情を以って助力を与えられた、友人土居光知氏へは、氏の Pater 研究に対する尊敬のしるし、又、二人がともに抱いてゐた興味と友情を記念するものとしてこのささやかな研究の結果を捧げる」とある。竹友先生はその序文で、土居光知先生のペーター研究に深く敬意を表され、お二人の間にはまぎれも無く＜友情＞と定義すべきものがあったことを述べておられるのである。昭和24年、阪大英文科を創設す

るにあたって、自らの支えとなる大事な助教授として、土井先生のお弟子さんの矢本先生に白羽の矢を向けられたのは、ほかならぬペイターの作品の注釈の仕事をされたこの竹友先生であった。その竹友先生から数えて5代目が、玉井さんである。玉井さんに、ワイルドを通してのペイターへの深い思い入れあるのは、決して偶然ではないのである。

（大阪大学名誉教授）